

## 文化構築主義

### 構築される文化

「文化は構築される」と言う時、二つの意味を考える必要があるかもしれない。一つは、ある文化が創り出されるという意味。例えば、ハワイの伝統芸能であるフラは、19世紀にキリスト教宣教師によって禁止された後、カラカウア王によって復興され、1970年代の「ハワイアン・ルネサンス」を経て現在に至っている。このようにして現在のフラが創造されたという意味で「文化は構築される」と言うことができる。この場合、フラは師匠から弟子に伝承され、その時代の状況に応じて変容して、現在のフラ文化を形成しているというように、文化の構築は極めて実体論的に捉えられる。

もう一つは、私たちの意識の中で、ある文化のイメージが形成されるという意味。「アロハ・アーイナ（土地への愛）」はハワイの伝統的な価値観とされるが、ハワイの伝統文化は土地を慈しむものであると私たちの間で意識化されれば、その伝統文化は「客体化」されることになる。これは認識レベルでの文化の構築とも言える。それは多分に観念論的な文化であるものの、空想の世界で捏造された文化という訳ではない。この文化のリアリティは確かに存在していて、実体論的に捉えられる文化と切り離すことは難しい。

おそらく第1の文化が、私たちが普段よく考える文化だろう。実際に手に取って触れることができるか、そうでなくてもその中に身を置いて経験することのできるような文化である。一方、第2の文化は、文化そのものというよりも、文化の「表象」や「語り」を通して認識される文化のリアリティである。誤解を恐れずに言えば、前者は経験の中で無意識のうちに培われる文化であり、後者は多少なりとも意識的に語られ読み込まれる文化と言って良いだろう。両者は互いに影響し合い、また密接に結びついているが、互いに調和が取れ整合性を保っている訳ではない。

### 本質主義から構築主義へ

しっかりと実在していると信じられていたもの、不変の本質を有していると信じられていたものが、実のところ“発明”されたものであったと指摘されることがある。例えば、「子供」について考えてみよう。確かに子供は私たちの周りにいる。小学校の校庭に目をやれば、休み時間に遊び回る生徒たちを見ることができるし、子育てに追われる母親は我が子の存在に疑いを差し挟むことはないはずだ。ところが、フィリップ・アリエスは『《子供》の誕生』で、「子供」がヨーロッパ近代における発見であったと指摘している。すなわち、「子供」という概念がある時代において誕生したというのである。しかし、その「子供」という概念も、時代が変われば変容していく。また、ある社会では、結婚して子供がいなければ（一人前の）成人男性と見なされなかったりすることがある。この場合は、文化が変われば「大人」という概念が変わる例である。

所与のものとして存在すると信じられたものを“発明”と見なす考え方は、社会的なリアリティが構築されたものであるとする認識論へと導く。所与の、本質的な「子供」や「大人」というものは存在せず、それらは異なる時代や社会において作り上げられたものにすぎないという訳だ。また、この本質主義か

ら構築主義への認識論的転回においては、構築されるリアリティの「テキスト性」が突出して重要な問題となってくる。

構築主義的な視点に立って「文化は構築される」と言う時、主に前述の第2の文化に焦点が当てられており、その文化の領域に属する「伝統」や「エスニシティ」や「文化アイデンティティ」なども、この構築主義の射程に入ってくる。エスニック集団としてのハワイ人が、その定義や呼称を含め、どのように誕生したのかについて、また、先住民としてのハワイ人の文化アイデンティティが、表象と言説の空間でどのように形成されるのかについて考える時、この文化構築主義は極めて重要な視点を提供してくれる。

### 文化構築主義と文化の政治学

1980年代から90年代にかけて、人類学の分野では、それまで所与のものとして存在し本質を有していると信じられていた「伝統」や「エスニシティ」について、構築主義の視点から分析する研究が数多くなされた。文化の問題としてこれらの対象について検討する際、前述の二つの文化が必ずしも想定されていた訳ではないが、とにかく「文化」は（第1の意味であれ、第2の意味であれ）構築されるということが強調されたのである。

構築主義を唱える研究者は、反本質主義という立場を取るという点で同じ陣営に属していたが、必ずしも同じ理論を採用していた訳ではなく、そのラベルも「道具主義」や「状況主義」、更には「ポストモダニズム」など、様々である。ここでは、伝統や文化アイデンティティの人類学的研究における理論的視点を大きく3つに分けてみよう。

「本質主義」は、伝統や文化アイデンティティには核心的・本質的な部分があると見なす考え方である。勿論、時代が変われば文化の領域に属するこれらのものも変容するが、その本質的な部分は不変であると考えている。一方、所謂「伝統の発明」論に代表されるように、伝統や文化アイデンティティの構築性を客観的に解明できるとする視点を「客観主義的構築主義」と呼ぼう。これは、どのような状況で伝統が発明されるのか、また発明された伝統がある目的を達成するためにどのように（道具のように）用いられるのかに焦点を当てる。

客観主義的構築主義は、「本物の」伝統と「偽物の」伝統、「本当の」過去と「理想化された」過去というように、伝統や過去を二項対立化させ、伝統や過去の解釈に基づいて構築される文化アイデンティティの正統性を見極めようとする。そのため、人類学の対象文化に対する学問的権威性を強めてしまい、一時のオセアニア研究において人類学者とネイティブ知識人の間で文化表象を巡る政治学的論争が起こった。それは、人類学者の文化構築主義とネイティブの戦略的本質主義の対立でもあった。

このようなポストコロニアルな状況において露呈した客観主義的構築主義の限界を乗り越えるべく提示されたのが「ポストモダンの構築主義」である。その立場は、あらゆる「文化」を構築されたものであるとする。しかし、そうすることで、戦略的本質主義や構築主義の提示する「文化」のみならず、ネイティブが自らの文化に対して持つリアリティまで脱構築してしまうという問題に直面することになったのであった。